

## 「中村元東方学術賞」授賞理由

受賞者 宮治 昭 龍谷大学教授

宮治昭氏の学問上の貢献は、インドおよび中央アジアの仏教美術に関する図像学的研究です。同氏の研究の出発点は一九六九年から一九七八年に四度にわたって行われた、アフガニスタンのバーミヤーン遺跡の実地調査に基づく研究です。二体の大仏の仏龕天井壁画や多くの石窟壁画を詳しく調査し、インド・中央アジアの諸美術との綿密な比較研究を行い、バーミヤーンの仏教美術史上の位置づけを明らかにしました。その研究は美術の様式的な比較考察に留まらず、バーミヤーン美術に見られる弥勒菩薩・千仏・涅槃図などの図像的な特徴を経典と詳しく照合することによって、バーミヤーン美術の仏教思想上の意味を考察したもので、独創性に富む研究として注目されました。

氏の研究上の特徴は美術史学に軸足を置きながらも、仏教学・文献学にも目を配り、仏教美術における図像解釈学（イコノロジー）の方法を確立した点にあります。様式論や編年論を中心に進められてきた従来の仏教美術史研究に、新しい視点を切り開いたものと言えます。名古屋大学において美術史学の町田甲一教授、辻佐保子教授の薫陶を受け、またインド学・仏教学の北川秀則教授、立川武蔵教授の指導を受けた経歴が、その学問を形成するのに役立ったものと考えられます。

宮治氏は一九七四年以降、毎年のようにインド・パキスタン、中国新疆・甘肅省をフィールドとして、幅広く仏教遺跡・美術の調査を精力的に行いました。バーミヤーンにおいて涅槃図と弥勒菩薩が図像プログラムの鍵となっていると考えた同氏は、それらの図像を軸にして、ガンダーラ・インド、そして中国新疆・敦煌の仏教美術を視野に入れ、図像の生成、変容という視点から考察を深め、その研究成果を『涅槃と弥勒の図像学—インドから中央アジアへ—』と題して名古屋大学に博士請求論文として提出し、一九九二年に吉川弘文館より出版されました。この論考は、優れた仏教美術史研究として高い評価を受け、同年國華特別賞が授与されました。また、この著書は「佛教芸術与敦煌学名著訳叢」の一冊として、北京・文物出版社から中国語訳が刊行されました（二〇〇九年）。

その後も宮治氏はインド亜大陸の仏教美術の実地調査を継続し、前三世紀以降のインド古代初期美術から、十二世紀末に仏教が終焉を迎えるパーラ朝時代までの、千年以上に及ぶインドの仏教美術の歴史を、図像の成立、発展、変貌

という視点で捉えようとする数多くの論考を発表しました。仏教美術はインドの土着的な民間信仰や、あるいはバラモン教・ヒンドゥー教、さらにはギリシヤやイランの宗教など、仏教外の異宗教・異文化と接触し、それらの要素を吸収することによって生成する点に大きな特質があることを具体的に明らかにしました。その研究成果は『インド仏教美術史論』としてまとめられ、二〇一〇年に中央公論美術出版から刊行されました。

この論考の中で、最初期の仏像がガンダーラの「梵天勧誘」場面に現れ、仏像の成立と関わったと見られること、また半跏思惟像がガンダーラで出現し、菩薩思想と関係して展開したこと、さらにはガンダーラに仏陀と両脇侍菩薩から成る仏三尊像や仏国土の表現が見られ、大乘仏教の信仰と関わったことを明らかにしました。また、仏陀の悟りの本質を表す「成道」と「涅槃」を対比させた図像研究を行いました。すなわち、インドでは「涅槃」はストゥーパによって象徴されたことから説話的な展開が見られないのに対し、「成道」は「降魔成道」として仏伝の説話的、図像的な発展が著しいことを指摘し、魔王・魔衆のイメージを中心に、その地域的・歴史的な変化のあり様を詳しく跡づけ、グプタ朝以降、密教化する様相についても明らかにしました。さらに、観音菩薩像のインドにおける図像的な展開について、実地調査に基づく多数の作例を整理し、分析を加えることによって多臂観音・変化観音・密教系観音の様相を文献の検討を加えつつ明らかにしました。

宮治氏の研究はこれ以外にも、中国新疆トルファンのとヨク石窟壁画の禅観の図像に関する興味深い研究があります。西域で不浄観・白骨観と並んで、『観無量寿経』と関わる浄土の観想図が描かれ、禅観の実践と結びついて『観無量寿経』が流布したことを明らかにしました。以上のようにインド・中央アジアの仏教美術史研究に新たな地平を拓いたものとして高く評価され、二〇一一年には中日文化賞が授与されました。

宮治氏は学術的な論文や著書以外に、啓蒙的な著作として『インド美術史』、『ガンダーラ 仏の不思議』、『仏教美術のイコノロジー—インドから日本まで—』、『バーミヤーン、遙かなり』、『仏像学入門—ほとけたちのルーツを探る—』などの好著を出版し、仏教美術に対する関心を多くの人々に惹起し、その影響力は著しいものがあります。

以上の理由により、宮治昭氏は中村元東方学術賞を授与するに相応しい業績を挙げられたものと判断され、今回の授賞となりました。